

祝起舟 大漁旗と 縁起の鯛



3

平成21年

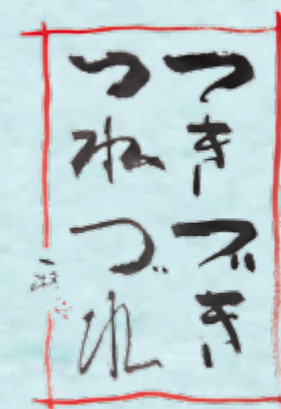


広報のと 第49号

平成21年3月1日発行

■発行・能登町 ■編集・広報情報推進課
〒927-10402
石川県鳳珠郡能登町字出津新1字1-97番地1

☎：0768-62-10000
能登町URL：http://www.town.noto.shikawa.jp
Eメール：info@town.noto.lg.jp



（やよい）
弥生

能登に恋した
抒情書家
室谷一柊・朱琴・文音
が描く能登の12カ月



古人（いにしえひと）や
風流（ふうりゅう）や
詩流（うたながし）
花流（はなながし）
盃流（さかづきながし）
雛流（ひなながし）

弥生
「いや生い」から「やよい」に
転化したという。
この季節 草木が萌
えいで 生々の気がみちる。
余寒のなかで春を待つ。
三月

この家の前の借り主は、下の囲炉裏の間の床をはがしてましたので、床からの風が舞い込み、ほかの部屋にも流れ込んで、とびきりの寒さでした。去年、冬前に心温かき人に床を張ってもらいました。おかげで床下全体が風の通り道になり、上にあがってこなくなりました。

そしてこの際にと、床を少し低くしてイソ式で暮らせるようにしました。その囲炉裏端の脇机には「写真集奥能登・フォート集団能登・北国出版社・昭和46年刊」が置かれています。

ひきつけられたページには、「囲炉裏を奥能登では「えんなか」といい、冬から春にかけて長い屋内生活での団らんの間となる」とあり、自在鉤が二本、畳一枚の広さの炬になるされ、炬端にはおばあちゃんが12人くらいか、これ以上ない笑顔が集まっています。ずっと気になっていた答えにであえました。京都の美山時代には「どうぞ、こちらまで、からだも、こころも、こゆるりと・・・」と招くので「ゆるり」と言っていました。

「ゆるり」から「えんなか」へ。

どちらもひらがなで表現されているところがいいですね。いろいろと想像力が広がるではありませんか。一柊



室谷一柊・朱琴・文音

平成18年、京都府美山町から能登町大箱に移住し、アトリエを構えた抒情書家。生活の中で探した言葉をモチーフに作品を仕上げる。現在、『遠島山公園「ハーモニセンター」物語』を企画し、その1ページ目としての展覧会（4/14～5/15）を準備中。

奥能登に
抒情書家あり
アトリエあり
五友宿を
という